

東日本大震災四十九日慰霊法要

【人間社記者如昱 宮城県塩釜市報道】2011/04/29

日本文部科学省の宗教統計調査による日本の宗教信仰人数は約二億九百万人。その中でも神道、仏教を信じる人が九割以上を占めているので、日本人は一般的に「四十九日」や「死者の冥福を祈る」という概念を持っている。

4月29日は東日本大震災発生から四十九日目（または「七七日」、或いは「満中陰」と呼んでいる）になる。今回の地震、津波では計14,662名の方が亡くなり、行方不明者は11,019名になる。亡くなった方とその家族にとって「四十九日」はとても大事な日である。

日本の佛光山各分・別院はこの大事な日のため、初めに本栖寺が4/23から2日間の精進念仏法要を行い、続いて大阪佛光山寺で4/28から5/1まで4日間の梁皇慰霊法要を行い、東京佛光山寺では5/2から5/5まで、「為東日本大震災消災祈福暨超薦回向梁皇法会」を行い、生きている方の幸せと、亡くなった方の冥福を祈った。

29日朝、本栖寺住職満潤法師及び東京佛光山寺住職覚用法師は佛光山の法師と信者計四十八名を引率し、二台の大型バスに分乗して、生活物資贈呈及び「七七慰霊法要」を行うため、宮城県塩釜市に向かった。法要を進行する際には信仰の違う方の事情を考慮し、お線香をお供えしていただく代わりに献花を行っていただいた。大勢の子ども達が母親や祖母に連れられ、一緒に合掌し、死者の冥福を祈ると同時に、行方不明の被災者に対して最大の祝福を捧げた。仏号が唱えられる中、様々なことを思い涙が止まらない方もいた。それでも合掌し、亡くなった方が安息できるよう祈っていた。

各被災地区では、住宅・物資・交通等が未だ完全に復旧していない。長くて遠い「復興への道」、被災者の方々は亡くなった方々のために供養をしたくてもできなかった。この外国の仏教団体に感激し、心から感謝してくれた。

